

# 神力坊と三巻上人の経筒

—西日本の廻国経筒2—

足立順司

**要旨** 今回は九州地方の廻国聖と経筒を取り上げる。その一人は薩摩の修驗井尻神力坊で、戦国時代の廻国聖では、もっとも履歴のわかる人物である。この人物にかかる弘治元年銘の経筒が茨城県と鹿児島県から出土している。この経筒と出土地の分析を行い、さらに同時代史料から、神力坊が単なる廻国納経の修驗者ではなく、戦国大名島津氏の使者として大友氏に島津氏の口上を伝えるなど、大きな役割を担っていたことを指摘した。

人吉市南町からは、骨塔と呼ばれる石造物から、六角宝幢式経筒が発見された。骨塔は、人吉藩主相良長毎の供養のために、犬童玄俊なる人物が造立したものであった。玄俊はそれ以前に相良長毎の供養のために、廻国納経の旅をつづけ、遠く奥州松島の地にも供養碑を建てている。南町から出土した廻国経筒には、駿河三巻上人銘が彫られていたが、この上人号についても、勅許による僧号ではないかと考えた。この経筒は、人の歯を納めるために再利用した例でもあった。

ほかに九州地方の廻国聖についてもふれ、彦山や黒髪山などの修驗者が、少なからずみられたことも指摘した。

**キーワード：**廻国経筒、薩摩神力坊、島津日新公、駿河三巻上人、犬童玄俊の廻国、相良長毎の供養碑

## 1 井尻神力坊の経筒

16世紀の六十六部廻国聖の中に、唯一といってよいほど履歴のわかる人物がいる。これが小論に登場する薩摩島津氏の家臣、井尻神力坊という修驗者である。この神力坊については、その名前を刻んだ廻国経筒が、茨城県行方市（旧玉造町）泉字原新田と鹿児島県南さつま市（旧加世田市）武田下字鼻ノ上の遠く離れた2ヶ所で、それぞれ1口計2口が発見されていることも、注目されている。

1口目の経筒が出土した行方市（旧玉造町）泉字原新田は、霞ヶ浦東岸の台地上にある集落である。経筒の発見経緯については、つぎのように『水府志料』にあるが（茨城県1968）、今日、その出土地の詳細はわかつてない。

「宝永4（1707）年の春、原新田玉造村内の百姓大島氏或云大場氏治部左衛門なる者、其家側にありし桜樹の風に倒れし下よりほり出す。内に経巻の朽腐せしものと見え、砂のごとく、灰のごとくの物有りしとぞ。今は築地村妙光寺の什物となれり。」

十羅刹女 薩州住神力坊

梵字 奉納大乘妙典一国六十六部聖

## 三十番神 弘治元年今月今日

経筒は現在、潮来市築地妙光寺にあるが、円筒形の筒身のみで蓋は認められない。筒身の高さは9.6cm、直径4.3cm、底径4.8~4.6cm、筒身の厚さ0.5mmを測る。筒身の銅版を3ヶ所舌止めし、底部は筒身の下部に突起2個を作つて舌止にするものである。鍍金が銘の部分を中心にわずかに残っている。銘文は細い線刻であり、奉納の書式にあわせて釈読するとつぎの通りで、『水府志料』にはわずかに脱字と誤読があったことがわかる。

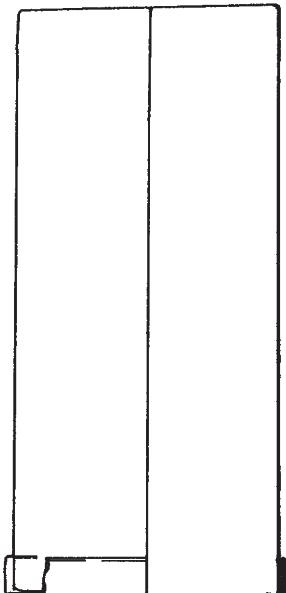
バク 奉納大乘妙典一国六十六部聖

十羅刹女 薩州之神力坊

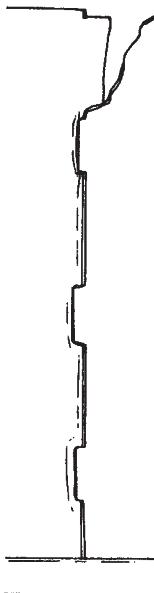
三十番神 弘治元年今月吉日

この原新田を含む霞ヶ浦東岸では、廻国経筒が数多く発見されている地域である。詳しくは後に述べるが、この地域は全国の廻国聖が寄留する場であって、そこには常陸を本貫（住国）とする廻国聖の坊舎もあったものと推定している。

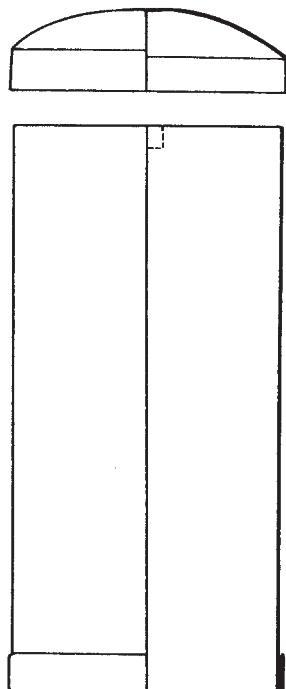
2口目の経筒が発見された南さつま市（旧加世田市）武田下字鼻ノ上は、薩摩半島南部に位置し、吹上浜の海岸線



1 原新田經筒実測図



2 神力坊の銘文



3 武田下經筒実測図



4 原新田經筒



5 神力坊の銘文



6 武田下經筒



7 武田下經筒の經筒

番号	経塚名	県名	年紀	西暦	聖住国	聖名	経典名
1	杉浦丘園藏	不明	享禄2	1529	越後	賢心 小聖道順	大乗妙典
2	坂本館山	宮城	享禄2	1529	陸奥	祐弥	法華
3	愛宕山	宮城	享禄4	1531	越前	善宥	大乗妙典
4	杉浦丘園藏	不明	天文19	1550	紀伊	海心	大乗妙典
5	木越	新潟	天文年	1555	山城	真光	大乗妙典
6	武田下	鹿児島	弘治元	1555	薩摩	神力坊	大乗妙典
7	七ツ壇	福島	弘治4	1558	陸奥	宗叶	大乗妙典
8	大島新	富山	永祿6	1563	常陸	祐円	大乗妙典
9	愛宕山	島根	当年	1600	出雲	華重房	經王
10	愛宕山	宮城	当年	1600	信濃	玄成坊	大乗妙典
11	姫塚	新潟	当年	1600	伊勢	道順	大乗妙典
12	姫塚	新潟	当年	1600	美濃	道巴	大乗妙典
13	松田光氏藏	不明	当年	1600	常陸	養源坊	大乗妙典

表1 牡丹唐草文蓋経筒一覧



8 武田下經筒蓋

### 第1図 神力坊の経筒

から5km程内陸に入った志原段丘上にある。経筒が出土した地点は、全長約12~10m、高さ約2mを測る前方後円形塚もしくは円形で造りだし部をもつ塚で、現在は井尻神力坊経塚として説明板が建てられている。

経筒の発見については、昭和29（1954）年2月、塚頂部に自然石が立てられている場所を土地所有者が掘ったところ、経巻の入った経筒や鏡、元豊通宝1枚が発見されたという経緯である。現地に残る自然石は大きく、経塚の標識として立てられたと考えられる。

出土品のうち経筒は、円筒形で蓋には牡丹唐草紋が彫られている。筒身の高さ9.4cm、直径4.4~4.3cm、底径4.6cm、筒身の厚さ0.5mmを測り、蓋は高さ1.43cm、直径4.6cmを測る。筒身の高さは原新田経筒に比べ、2mm程低い。ただし原新田経筒は破損箇所の底部を後世に直しているので、ほぼ同じ寸法であった可能性が高い。筒身の銅版を3ヶ所舌止めし、底部は筒身の下部に突起2個を作つて舌止にするものである。鍍金が銘の部分を中心に明瞭に残っている。南さつま市竹田神社に奉納され、保管されている経筒の銘文はつぎの通りである。

バク 奉納大乘妙典一国六十六部聖

十羅刹女 薩州之神力坊

三十番神 弘治元年今月吉日

銘文は細い線刻であり、原新田経筒と比較すると、同じ文字を異体字として使用し、さらに第1図-2のように特徴的な文字の運筆で、払いや止めなど一致しているので、同じ人物の手による下文字によって、彫られたと解釈できる。つまり同じ工房で同時に製造された可能性が極めて高い。

蓋の紋様の牡丹唐草紋は表1のように東国に多い蓋紋様であって、神力坊銘の経筒は東国で造られた可能性が指摘される。

出土した鏡は直径12.5cm、厚さ0.91cm、半球形の摘みは径2.79cmを測る。18世紀頃の重圓文鏡とする意見もあるが（関秀夫1999）、黄銅質で明の「弦紋鏡」である（国立歴史博物館1996）。弦紋鏡は唐代からあるが、実用本位の紋様と銅質から、明代と考えられる。摘み部分に鉄錆が付着しているが、取り上げた出土品には該当例はないので、取り上げなかった何らかの鉄製品が鏡付近に埋納されていたと推定される。

出土した篆書体の元豊通宝は直径2.27cm、厚さ1.12mm

を測る。輪も不成形で薄いので、模鋳鏡ではないだろうか。すると鏡も元豊通宝も江戸時代の埋納品ではなく、弘治元年という経筒の年代をむしろ裏付けるものと考えることができる。したがって弘治元年以降の、井尻神力坊の薩摩帰国後、廻国業の満願を記念して武田下の地に経塚を築造し、東国で製造された経筒を鏡や銭貨などとともに埋納したと理解したい。弘治元年という年は何らかの祈念の年月であろうが、それ以上は理解しえない。

## 2 井尻神力坊について

鹿児島県南さつま市竹田神社には、寛政11（1799）年に描かれた山伏姿の井尻神力坊の肖像が残されている。この肖像画は天正3（1575）年の神力坊の死後、二百年余り経つて描かれたものであるが、頭に頭巾をつけ、菊綴を綴じ込んだ結袈裟を着、数珠を手に掛けて合掌している姿である。描かれた神力坊は鼻も高く鋭い眼光で、精悍な姿になって、後世、神力坊とはこのような人物として、想像されていたこととなる。なお結袈裟が当山派の磨紫金袈裟ではないので、神力坊は本山派修験であった。

また肖像画の上部には神力坊の徳をたたえる讃が記されているが、その姓は井尻、名は宗憲、神力坊という坊名を自称し、その人格を「為人剛強以義勇乎」と記し、描写された肖像の印象と一致する。

「日新菩薩記」とは、島津家中興の祖とされる島津忠良の功績を伝えるために著されたものである。この書の題となった日新とは島津忠良の号、「日新斎」にちなむもので、忠良の死後、その菩提寺を日新寺（曹洞宗）と改めたほどである。明治維新の神仏分離によって、この日新寺は竹田神社となった。つまり竹田神社の祭神は、島津日新斎忠良である。

この「日新菩薩記」には「家國繁興長久の為に、一箇国に於いて法華經六十六部御奉納の御誓願、乃ち井尻神力をして回国せしむ。然るに彼の皆道に出る則は、同行百人百余人薩摩神力と額を打ち、諸国に誉声を貽し、二十二年に至りて四千三百五十六部の妙經を拝納成就して、本国此の地に帰りぬ。斯の功を勲賞して、日州真幸院内に大明神一所を宛行れり。」とある（北川鐵三校注1966）。つまり井尻神力坊は、島津忠良の命を受け同行百人百余人とともに全国に法華經六十六部を奉納し満願成就したのち、帰国したという。その後、島津氏はその功に報い、井尻神力坊に



1 武田下経塚出土弦紋鏡



2 元豊通宝



3 神力坊肖像



4 神力坊の墓（竹田神社）



5 竹田神社



7 位置図（武田下経塚● 竹田神社○）



6 武田下経塚



8 経塚上の自然石

## 第2図 神力坊と武田下経塚

は「日向飯野城下にあった諏訪大明神（えびの市大明司）大宮司」をあて、大明司古墨を守らせたとされている（宮崎県1998）。

神力坊が与えられた所領の真幸院は南九州四カ国の接点に位置し、政争の舞台となった地域で、国人領主北原氏の所領であったが、永禄6（1563）から7年に島津氏が勢力下に治めた地域である。

他方、天保14（1843）年編集の『三国名勝図絵』「日新寺」の項には、神力坊について、以下のような別の末路を伝えている。神力坊は廻国業満願により薩摩に帰国したが、すでに島津日新公が死去していたため、出家の身であったので切腹できず、木の上から飛び降り、天正3年12月27日に殉死したと記している。

栗林文夫「井尻神力坊について」（栗林文夫2004）は、神力坊に関する文献・考古資料などを整理した業績であるが、この点についてもふれ、他の資料からも『三国名勝図絵』の創作ではないかとした。この栗林氏の神力坊に関する論考は、史料を集成し新知見を提出していることから、この論考を継承し、以下、私流の神力坊像を描いてみたい。

井尻神力坊の苗字の地について、栗林氏は日置市（旧吹上町）大字永吉に井尻の小字があることから、苗字の地の有力候補とした。天保13（1842）年編集の『本藩人物誌』に基づいたと考えられる『加世田市誌 下巻』によると、神力坊は、父を島津氏の兵具方奉行井尻佐渡祐元、宇多次郎左衛貞次の娘を母とし、その二男として田布施の地に生まれたという。田布施とは南さつま市（旧金峰町）であり、その地の利から神力坊は、金峰山修験であった可能性が高い。同市史によると、神力坊の母は、島津本家に入った島津忠良の長子貴久（島津家十五代）の乳母であったという。『本藩人物誌』によれば別の井尻佐渡守祐宗という人物の母のこととするが、井尻佐渡守祐宗という人物は、神力坊の本名宗憲に共通する「宗」の字を使っていること、神力坊の父親と同じ佐渡守の受領名をもつことから、神力坊の兄弟と思われる。

神力坊の墓は宮崎県えびの市坂元靈園と南さつま市竹田神社内にあるが、坂元靈園の墓は神力坊の大明司時代の子孫達によって造営されたもので、その墓石には「權大僧都宗憲 天正十壬午十二月二十七日」とあり、先の天正3年死亡と異なっているという（栗林文夫2004）。猶子も含め

神力坊の子孫達は何流も分家し、今日まで続いている。

先の栗林氏の史料集成によって、神力坊と同じ時代の文書史料から、以下の神力坊の動向を知ることができる。

島津氏の使者として、島津氏の口上や文書や贈答品を携え相手に伝達した。永禄7（1564）年、日向伊東氏が島津所領の真幸院を押領した。これに対する島津の対伊東氏との反撃には、大友氏との和議が前提であって、その際の使者として神力坊は、島津義久から豊後大友家の一門である戸次紹花のもとへ、さらに島津の重臣から大友氏の重臣への使者となっている。

島津氏の領域支配は、城下とその近郷、南西諸島とそれを除いた外城（とじょう）にわかれていた。外城はさらに家臣の「一所地」と、島津氏の直轄地の「地頭所」に分かれていた。地頭所はその責任者の地頭とその指揮下に在郷家臣の外城衆（衆中ともいう）が地域支配を担っていた。島津氏の軍事編成も地頭・衆中制に基づいていた（桑波田興1958、福島金治1988）。

神力坊への書状の差出人は、川上忠智や新納忠元ら地頭であり、その指揮下に神力坊はあったこととなろう。川上忠智は永禄7（1564）年に新幸院飯野の地頭であり、直接その指揮下にあったとしてよい。新納忠元については、天正2（1574）年には薩摩大口や牛山の地頭であり、その指揮下にはない。栗林氏が推定するように、書状の内容は永禄11（1568）年の大明司古墨守備に伴う合力を伝える内容であろう。

「同行百人百余人薩摩神力と額を打ち」廻国に出た神力坊とは、一人一人が薩摩修験の神力坊であり、その集団を束ねていた人物が、井尻宗憲であったと考えている。これら集団は複数に分かれ、東は東の集団、西は西の集団として、全国を回っていたと理解できる。ちなみに神力坊には豊前坊と常陸坊という猶子がいた。彼の地から薩摩につれて育てていたという（栗林文夫2003）。このことから常陸に神力坊もしくはその集団の一人が寄留し、猶子を見出したと考えられる。そして常陸坊のふるさとはどこであったかといえば、霞ヶ浦の東岸地域であり、1口目の経筒が発見された原新田周辺が、最有力候補であろう。

神力坊は「二十二年に至りて四千三百五十六部の妙経を拝納成就して、本国此の地に帰りぬ。」（北川鐵三校注1966）とあるが、その間薩摩に帰国しなかったのであるか。このような同時代史料からみえる神力坊の姿からす

れば、島津氏の使者とともに情報収集の役割が考えられる。江戸時代の六十六部廻国聖には所定めずそれを生業としたり、ある一定の国に寄留し、故郷に帰らない場合もあるが、あくまでも神力坊の目的は、島津日新公の思いを成就し、帰国することである。

また江戸時代の廻国では年の一定期間に廻国し帰国、翌年からつきの廻国地域を巡るというケースや、ほぼ9年から5年で終え帰国している（藤田定興2003）。島津氏における修験の役割は、戦陣の組み立て・戦術・政策の選択にかかわって、御籤による決定に深く関与するほど大きい（永松敦1993）。このことからおそらく神力坊宗憲の役割は、22年も薩摩国を空けるほど小さくないと考えられる。よって「二十二年」という長い年月をそのまま神力坊一人の廻国業の期間と考えず、集団としての神力坊が満願成就した歳月と解すべきではないだろうか。

### 3 霞ヶ浦東岸

茨城県内からは伝世例も含め、20口の廻国経筒が認められているが、そのうち表2の6口が、現在の行政区の小美玉市、行方市の霞ヶ浦東岸から発見されている。中世国府のあった霞ヶ浦北側の石岡市および周辺から出土した例は、大永2年銘の北谷経筒、大永7年銘の染谷経筒（いずれも石岡市内から出土）、かすみがうら市（旧千代田町）の3例があり、それも含めると、この地域は全国的にも廻国経筒の集中地域である。紀年銘の年代は、大永から天文・弘治年間である。

これらの経筒の銘文から知ることのできる廻国聖の本籍地（○○国住とする）は、神力坊の薩摩、伊勢、山城、越前と地元常陸であるが、常陸の例は国衙周辺と武藏原（鶴見貞雄1995）である。地元常陸ばかりではなく、他の廻国聖も經典埋納の作善を行っていた地域となろう。

廻国聖の活動はこれにとどまらず、つぎのようなケースもある（石岡市教育委員会1996）。

釈迦 普賢菩薩 文殊菩薩 阿弥陀如来 の種子

奉行常行三昧本願一國六十六部上人源弘

旦那富田出雲守子/掃部丞

妙悦/外記助國久

永禄十一年戊辰十一月十七日

師亮範

この碑は石岡市東大橋三井寺跡にあり、自然石の板石に

刻まれているが、ここに刻まれた常行三昧とは90日間歩きながら阿弥陀仏の名号を唱え、心に阿弥陀仏を念ずるきわめて困難な業である。これを上人号の勅許をえた、六十六部の源弘がなしえたことを顕彰する内容である。なお常行三昧業であるから天台系聖であろう。

經典埋納や常行三昧業および石碑の建立には多くの助力が必要であり、廻国聖の寄留地として活発な活動をうかがい知ることができ、この地域に神力坊の経筒が埋納されたことも首肯できよう。

### 4 駿河三巻上人の経筒

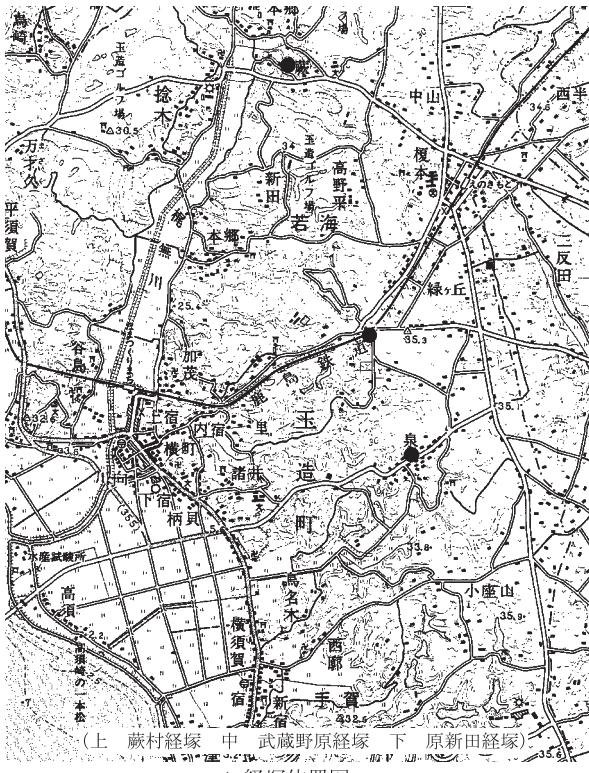
昭和49年6月19日、熊本県人吉市南町を流れる球磨川の支流胸川の改修工事中、石灯籠形の石造物が発見された。この石造物と収納された遺物については、調査者の桑原憲彰氏によって『熊本県文化財調査報告書 第22集』の中に報告されている。以下については、報告書と桑原氏の教示によるところが大きく、あらためてその学恩に感謝したい。なお、私見の釈文の一部は、報告者の釈文と異なること、小論の釈文の（異）とは、その文字が異体字であることを付け加えておく。

発見された灯籠形の石造物は、塔身につきの銘が刻まれ、相良人吉藩主相良長毎（さがらながつね）の供養塔であることが判明した。銘文は、以下のように「骨塔」と刻まれていたことから、発見された石塔は、相良長毎の供養のため造立された供養塔で、骨塔と呼ばれたことが判明した（桑原憲彰1977）。

正面 骨塔 逆（異）修（異）玄俊庵主 生年六十五歳  
2面 □□氏蔵人者相良氏代々之家也 年先為  
3面 瑞祥院殿天叟玄高 大居士御菩提移歩  
4面 於六十余州遊心於十方刹土荷擔法華  
5面 妙典獻納者一回一部矣 尽好□（栗原氏は干カとする）勲功者專上報君恩  
6面 下世家門者也 于時延宝二（1674）甲寅四月廿九日

銘文から65才の玄俊は、瑞祥院殿天叟玄高大居士（藩主相良長毎）の菩提供養のため、六十余州を法華経一回一部の納経を行っていたことや玄俊の勲功を子孫に伝える趣旨が明記されている（第4図 骨塔移設地）。

この塔は硬質凝灰岩製で、六角形の塔身には直径9cm、深さ12cmの穴が穿たれ、その中に六角宝幢式経筒1口が



1 経塚位置図



2 泉地区近景

番号	経塚名	市町	形式	年紀	西暦	住国	聖名
1	原新田	行方市	円筒	弘治元	1555	薩摩	神力坊
2	蕨村	行方市	不明	天文19	1550	山城	長泉
3	芹沢村	行方市	不明			常陸	
4	南	行方市	八角	天文11	1542	伊勢	良伝
5	武蔵野原	小美玉市	円筒	当年	1600	常陸	□□
6	山野大塚前	小美玉市	円筒	当年	1600	越前	善長
7	染谷	石岡市	円筒	大永7	1527	常陸	祐□
8	北谷	石岡市	円筒	大永2	1522	常陸	宥永 有誉
9	清水並木	かすみがうら市	円筒				

表2 霞ヶ浦東岸・周辺出土経筒 当年は1600年と表記 7は吉澤悟氏教示による。

第3図 霞ヶ浦東岸の経塚

納められていた。さらにこの経筒内には、経筒の瓔珞と火葬された歯6本と火を受けていない歯22本、青く染めた布状の塊が発見された。おそらく歯は2人以上の歯であり、布状の塊に包まれていたと推定された。経筒はつぎの図像一尊と銘が刻まれている（桑原憲彰1977）。

尊像 一國三部・・・正面

十羅刹女 駿州（異）三巻（異）上人・・・右

三十番神 當年今月吉日・・・左

従来、正面の一國一部の一國は「藏」と読まれていたが、藏とは三藏の經・律・論のことであり、廻国経筒の銘文にはなじまない。運筆から藏の一文字の草冠ではなく、書き始めから横方向に一と刻まれているので、藏ではなく一國の二文字と理解でき、文意から廻国経筒の銘文にふさわしい。一國三部の銘文は、名古屋市笠覆寺出土経筒の銘に「奉納経王一國三部聖」とあり、永禄二年銘をもつ旧杉浦丘園コレクション（杉浦丘園1933）、松田光氏蔵の「薩州之住秀養坊」銘経筒にも「奉納経王一國三部聖」銘の経筒（松田光2009および吉澤悟氏の配慮により実見）ほかがある。いずれも六角宝幢式経筒である。

また尊像をはさむ十羅刹女と三十番神は法華經の守護神であり、奉納された經典が法華經であったことが判明す

る。右の三巻上人は、従来、三養上人と読まれていたが、養の下文字の食偏が已であり、巻の異体字と釈読した。

銘文の三巻上人という廻国聖の「上人」号についてである。この廻国聖の「上人」号はあまり注目されていなかったが、同じ頃の補陀落度海上人の例では、公卿万里小路家の伝送による勅許をえた僧号であったことから（根井淨2001）、同様に勅許による僧号と考えられる。つまり廻国納経にかかわって、僧号をえた廻国者も存在したといえよう。ただし廻国聖の伝送者は史料上、明確ではないが、渡海上人同様に公卿万里小路家の伝送にかかわった可能性は高い。

ちなみに六角宝幢式経筒の上人号は、本例以外につぎの通りである。

- 1 兵庫県加古川市一色経塚経筒 永禄元（1558）年  
阿春上人 筒身に図像（三宅敏之1983b）
- 2 東京都大悲願寺伝世経筒 天正13（1585）年  
月尊上人 筒身に三尊 経王（三宅敏之1983b）
- 3 松田光氏蔵経筒 当年  
宮雪上人 筒身に三尊 経王（松田光2009）
- 4 三重県仙宮神社伝世経筒 当年  
快養上人 筒身に一尊 経王（三宅敏之1983a）

- 5 埼玉県草加市柿木経塚経筒 当年  
快円上人 筒身に一尊 経王（小沢国平1965）
- 6 千葉県成田市天王船塚経筒 当年  
快賢上人 筒身に一尊 経王（千葉県企業庁1975）
- のことから、共通項として上人号を刻む廻国経筒には尊像が描かれ、法華經の異名である経王（法華經は經典の中の王という意味）を用いていることが指摘できる。円筒形経筒のうち上人号の経筒は、福島県喜多方市湯殿神社経筒2の海口上人の例（足立順司2004）、秋田県男鹿市大倉経塚経筒2の扶経上人の例（足立順司2000）の2口があるが、やはり法華經の異名である経王と刻んでいる。通常、廻国経筒では円筒形経筒が圧倒的に多く、上人号の経筒には本例も含め7口が六角宝幢式経筒、2口が円筒形経筒とする結果をえた。のことから、上人号の経筒には六角宝幢式経筒が選ばれることが多く、廻国聖のうち、ある特定の門流の特徴が現れていると推定したい。法華經を異名である経王とする経筒は、円筒形経筒が28口、六角宝幢式経筒が24口であるが、どのような廻国聖が法華經の異名である経王を用いたのかは、今後の課題である。

三巻上人の経筒に刻まれた一尊の尊像は、蓮華座に趺座する僧形の像としてみられていたが、僧の上部に3個の弧線による山頂部がみられ、光の表現とは異なる。これを螺旋と肉髻（にっこい）とすれば、尊像は如来形の釈迦像と考えられる。肉髻とは頭の頂の肉が盛り上がっていることで、釈迦の身体的特徴（三十二相）のひとつである。すると六角宝幢式経筒の一尊像としては、釈迦像は通常の尊像であり、特異な例ではない。

しかしながら六角宝幢式経筒のうち、他の一尊像の光背は弧線や列点で丁寧に表されているが、これは円光や火焔光、輪光の表現とされる。本例の場合、光背外周に放射光の表現があるので、光の表現は外周のみであり、細部の表現では他の例と異なり、省略されている。

経筒は宝珠と露盤はない。最初に経筒が発見された昭和25（1950）年頃の談話が報告書に記述されているが、「納骨容器（経筒のこと）の蓋には鉢もあったが」とされているので、それまでは宝珠と露盤があったのではないだろうか。筒身には瓔珞も入れられていたので、蓋に瓔珞の飾りが残っていたと考えられる。

経筒身部の接合法は、厚さ1.1mmの銅板の一方に3カ所の切り込みを入れ、他方に3カ所の舌を作り出して、舌を

切り込みに差し込む舌止め接合である。さらに身部頂部の縦方向の1カ所を内側から外側へ舌を折り曲げ固定している。身部と底部は4カ所を舌止めしている。

## 5 奥州松島の供養碑

人吉市南町の骨塔を造立した人物玄俊庵主は、2面に刻まれた□□氏蔵人と同一人物であることは、銘文から読み取れた。しかしながら、この人物について色々推定案があつたが、いずれも資料的裏付けがなく、それ以上わからなかつた。

ところが意外にも渋谷敦氏や堀野宗俊氏によって、遠く離れた宮城県松島でその手がかりが発見された（堀野宗俊1993）。その重要な手がかりである相良長毎供養碑は、つぎの銘文が刻まれていた（渋谷敦1993）。

前住花園現在松島雲居叟希膺述書  
九州肥後國求麻郡 瑞祥院殿前武衛天叟  
玄高大居士 世系藤原氏相良 其名長  
每生年十八而豊國大明神 征三韓水  
軍陸戰口大功 二十七歳屬東照大權現  
之令 於大垣誅三將致大忠 以故到當  
明三代將軍清治之日 恩遇超群僚官位到  
四品 家臣犬童善四郎長廷（任） 遷世捨身  
修大居士菩提 納經於松嶋日磨碑 請銘  
於余乃銘云

濁世鳥曇忠義臣発心修道弔亡人  
何知西海遠方伯陸奥東辺現仏身

寛永十四（1637）年六月十三日

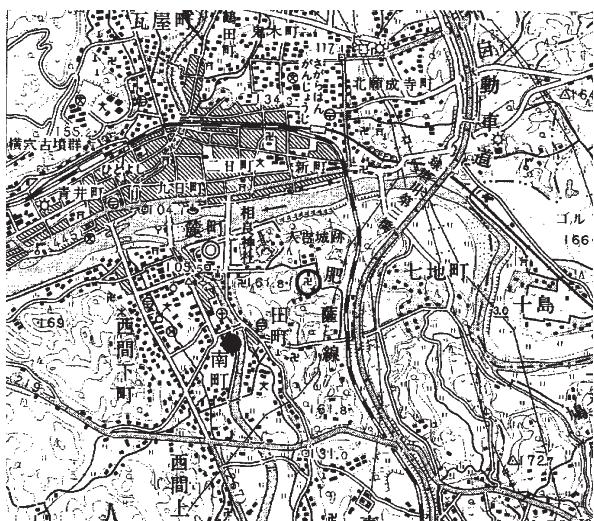
犬童善四郎入道玄俊建焉

同行安心宗園□□

高琢磨之□

渋谷敦氏や堀野宗俊氏が指摘するように、南町の骨塔を建立した人物玄俊庵主は、俗名犬童善四郎長廷（任）といい、相良長毎の家臣であった。石碑の内容からこの人物が、同行の安心宗園とともに奥州の靈場松島に足を止め、主君相良長毎の一周年忌にあたり、その供養文を瑞巖寺の名僧雲居希膺に依頼し、供養碑を建立した、というものであった。おそらく犬童善四郎は主君相良長毎の死去に伴い、玄俊庵主として出家遁世し、廻國納經の旅の途中にあつたのであろう。

さらに付け加えると犬童長廷（任）の「長」とは、相良



1 人吉市南町石塔出土位置図 (●出土地)



2 出土地近景



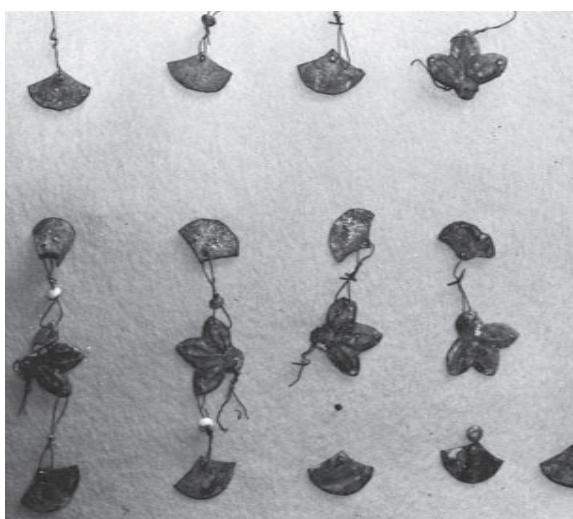
3 三巻上人の経筒



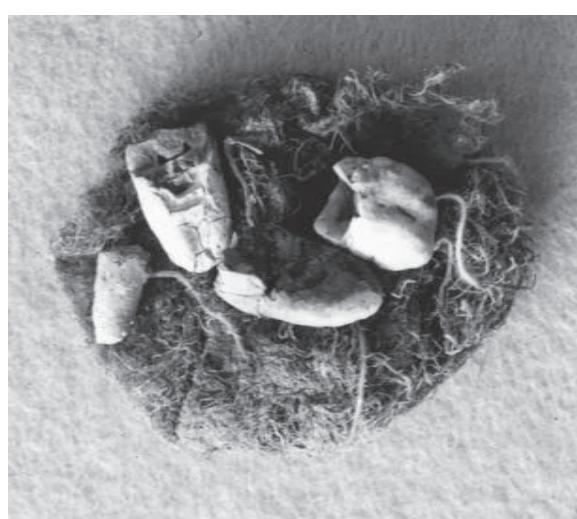
4 銘文と図像



5 玄俊銘の石塔



6 経筒の瓔珞



7 経筒から出土した歯

#### 第4図 経筒と石塔

長毎の本名の一字を賜名されたと考えられ、特に重要視された家臣であったと推定される。南町の骨塔にある玄俊の年齢は65歳というから慶長14年前後の生まれとなり、松嶋の供養碑を建てた寛永14年には28歳前後と若い年齢である。若い時期の逝世と廻国納経は、主君長毎への深い思いであったのであろう。南町の骨塔は、犬童玄俊による相良長毎の追善供養の廻国納経や家臣として犬童氏の勲功を伝える性格である。内部に納めた三巻上人の経筒は、犬童善四郎が玄俊として廻国納経の際、入手した可能性が高いが、三巻上人の廻国満願を果たした、いわば法華經の功德のつまつた容器として考えられたので、再利用したのであろう。

では歯をなぜ経筒に納めたのであろうか。松嶋にも骨塔があるが、高野山奥の院への高野聖の作善にみられるように、分髪・分骨し、死者の供養と来世への極楽往生を願うためであったのであろう。二人の歯の一人分は相良長毎の歯と推定したくなるが、確かめるすべを持たない。ではもう一人の歯はだれのものか。それは、すでに老境に到った犬童玄俊の自然に抜け落ちた歯ではないかとしたいが、これも確かめるすべを持たない。

従来、廻国経筒については、16世紀後半の天正年中を境に認められなくなっていた。しかしながら、今回、17世紀前葉の廻国納経の例を知りえたし、その際に廻国経筒の転用された例を知り、その背景にもふれることができた。

## 6 九州の廻国経筒と廻国聖

神力坊と三巻上人銘経筒以外に、九州の廻国経筒では、佐賀県嬉野市（旧嬉野町）から出土したと伝えられるつぎの六角宝幢式経筒が知られているが（三宅敏之1983b）、個人の所蔵品なので詳細は不明である。

1面 釈迦座像 奉納経王六十六部

2面 文殊座像 十羅刹女 雲州之慶順 宝相華文

3面 普賢座像 三十番神 当年今日月 宝相華文

4面 宝相華文

5面 宝相華文

6面 宝相華文

このように筒身の下半分を宝相華文で飾る例は、山形県飛行壇経筒や佐渡市長安寺経筒に類例があるが、六角宝幢式経筒の中では少数例である。

これ以外、戦前の経塚地名表には、永正から永禄年間の経筒の記録があるが、江戸時代の地誌を誤読した例や経碑を誤認した例がある。佐賀県旧岩船村とされている経筒は、小城市（旧小城町）岩藏の本覚院にあった例である。当時本覚院は岩松村にあり、岩船村ではない。大正13（1924）年の『國分日本金石年表』の段階から岩船村と誤記されているため、その後の経塚地名表（小田富士雄1989）にはそのまま岩船村となっている。もっともその後、経筒は亡失したらしく、取り上げられることはない。

ところで本覚院は岩藏にある修験の寺で、現在は真言宗醍醐派に属すが、天台宗岩藏寺の子坊であった。岩藏寺は如法経供養で著名である。経筒は永禄元年と永禄四年の銘があったという（佐野英山1924）。如法経作善にかかわった経筒の可能性もあるが、確かめるすべを持たない。

つぎに廻国経筒にみられた九州出身の廻国聖の動向についてふれてみたい。別表のように、太田南八幡宮の納札（表面を鍍金している）を加えると21例、うち経筒は20口であり、奉納先を見ると約半数の11口が太田南八幡宮から発見されている。出土地・奉納先は伝世場所不明の松田コレクション2口（松田光2009）、旧杉浦丘園コレクション1口（杉浦丘園1933）を除くと、茨城行方市神力坊銘経筒、下野宇都宮市牛塚南方経筒と山梨県塔の越経塚2口のうち六角宝幢式経筒1口（三宅敏之1983b）が東国である。京都伏見稻荷経筒（景山春樹1969）、愛媛高鴨神社経筒（足立順司2008）は奉納例で、かつ廻国経筒としても古い点を重視したい。つまり九州の廻国聖の経筒を携えた納経は全国的にも古く、おもに太田南八幡宮（近藤正1965）を初めとし、四国、畿内の靈場に奉納していたといえよう。塚を造って埋納した例は、本論の南さつま市神力坊の例と島根県経ヶ崎経塚（近藤正1967）と少なく、天文4（1535）年と奉納例より新しい。

廻国聖の本貫については、大田南身八幡宮経筒136号経筒の築州榎津は筑前ではなく、筑後であるので、豊後を除く8ヶ国で確認できる。そのうち大田南身八幡宮経筒139号経筒の□州彦山蓮佳坊とは、豊前彦山の修験者である。大田南八幡宮経筒143号経筒を携えた聖の日向鶴戸山とは、鶴戸山と判読でき、鶴戸神宮の別当寺鶴戸山仁王護国寺かその坊宇の廻国聖と推定される。この鶴戸山は修験道の一大道場であり、この廻国聖も修験者と考えられる。

大田南八幡宮経筒140号経筒は以下の銘があり、廻国經

番号	経塚名	出土・伝世県	形式	年紀	西暦	聖名	住国	関連地名	経筒の文様	経典名
1	大田南136	島根	円筒	大永5	1525	貞識 小型祐戈	筑後	榎津	なし	法華
2	大田南137	島根	円筒	天文2	1533	昌道 昌貞	筑前	なし	蓮華	大乗妙典
3	大田南138	島根	円筒	当年	1600	圓覺坊	筑前	なし	なし	大乗妙典
4	大田南139	島根	円筒	永正17	1520	蓮佳坊	豊前	彦山	なし	大乗妙典
5	大田南140	島根	円筒	永正13	1516	阿讚	肥前	黒髪山	蓮華	法花妙典
6	大田南141	島根	円筒	永正18	1521	慈京 小聖	肥前	有馬	なし	大乗妙典
7	塔の越	山梨	六角	当年	1600	照白	肥前	なし	一尊	大乗妙典
8	高鴨神社	愛媛	円筒	永正11	1514	道安	肥後	上村	なし	なし
9	伏見稻荷	京都	円筒	永正18	1521	祐玉	肥後	野原莊	蓮華	法花妙典
10	大田南142	島根	円筒	永正18	1521	曉海	肥後	八代	なし	大乗妙典
11	大田南143	島根	円筒	永正12	1515	祥祐	日向	鵜戸山		大乗妙典
12	大田南144	島根	円筒	永正18	1521	宝泉	日向	なし	蓮華	大乗妙典
13	絆ヶ崎	島根	円筒	天文4	1543	一心坊	日向	なし	柏	絆王
14	杉浦丘園藏		円筒	天文12	1516	道順	日向	なし	ぼたん	大乗妙典
15	大田南145	島根	円筒	永喜2	1527	栗道	大隅	なし		欠
16	牛塚南方	栃木	円筒	天文7	1538	宗偏	大隅		不明	大乗妙典
17	松田光藏		六角	当年	1600	快鏡坊	大隅	なし	一尊	絆王
18	武田下	鹿児島	円筒	弘治元	1555	神力坊	薩摩	なし	ぼたん	大乗妙典
19	原新田	茨城	円筒	弘治元	1555	神力坊	薩摩	なし		大乗妙典
20	大田南	島根	納札	当年	1600	日善上人	薩摩	なし		大乗妙典
21	松田光藏		六角	当年	1600	秀義坊	薩摩	なし	なし	大乗妙典

表3 九州住廻国聖の経筒・納札（一尊は身に釈迦を刻む）

筒では永正十三（1516）年と古い。

バク 奉納法花妙典六十六部内一部（異）

十羅刹女肥前黒髪山寶積寺

三十番神本願権少僧都阿讚

旦那同國吉松土佐守盛次

永正十三丙子（1516年）十二月吉日敬白

付記すればこの経筒は、筒身のみで12cmと高く、筒身は銅板を3カ所細い銅板帯を差し込んで折り返す止め方をし、底部と筒身を4カ所で止めるなど古い接合方法を探っている。「経巻一本を糸で巻き、更にそれを紙で巻いたものを筒に納入」（近藤正1965）という点でも、他の納め方と異なっている。

銘文の黒髪山とは、佐賀県武雄市（旧山内町）にある古来より九州を代表する修験の山であった。ここには黒髪神社とともに、真言宗大覚寺派黒髪山大智院（もとは地蔵院と称していたが、正保2年大覚寺の末寺となった）があり、これを一山組織とし修験の子坊をいくつか持っていた。140号経筒の黒髪山寶積寺とは、その坊の一つで、現在は伊万里市東山代町にある（山内町1977）。のことから江戸時代以前は、修験寺と考えられる。また本願権少僧都阿讚とは寶積寺の住職であり、廻国納経の本願たる人物であろう。

旦那となった同國吉松土佐守盛次とは、史料には認められない人物ではあるが、年次不明（天正4（1576）年前後と推定される）の後藤貴明宛の「小むれしゅう連署契状」（佐賀県1962）中に「吉松太郎左衛門尉」とある。吉松土佐守盛次と直接結びつく史料はないものの、同じ吉松の苗字からすれば、同族もしくは子孫と考えられる。小む

れ衆はにしノ衆、中山衆、東ノ衆にわかれ、吉松太郎左衛門尉は東ノ衆であったことから、吉松土佐守盛次は、肥前の国人後藤氏被官の地侍と考えられる。この小むれ衆とはどの範囲の地侍によって構成されていたのかは不明であるが、別に黒髪山周辺には山内衆があるので、後藤氏の拠点武雄市武内町ではないだろうか。この地には小むれ衆の苗字に共通する字「柿田代」、「井手の上」、「馬場」、「松尾」があることから、小むれ衆とは武雄市武内町の地侍集団と理解できる。すると大田南八幡宮経筒140号経筒は武雄市北域の地侍吉松土佐守盛次を旦那し、黒髪山寶積寺の権少僧都阿讚を本願として納経するための経筒と理解できよう。

## まとめ

神力坊や三巻上人の経筒、最後は肥前黒髪山銘の経筒にこだわってきた。最後に九州の廻国経筒を全体的傾向についてふれ、まとめとしたい。

九州の廻国経筒を携え、廻国納経する聖は、薩摩神力坊以外にも、修験者が少なからずいたことがわかった。そして神力坊はたんなる修験の廻国聖ではなく、政治・軍事にかかわる島津氏の重要な被官であった。

三巻上人にみられるように、上人号の聖には勅許による僧号が出され、補陀落渡海僧とも関係が推定された。玉名市の補陀落渡海碑には、下野の渡海上人の同船者に駿河、遠江の僧が確認される（根井淨2001）。同じ、廻国の果ての補陀落渡海であったと推定される。

霞ヶ浦東岸を踏査したのは1998年、人吉や旧加世田市を踏査したのは、2000年のことであった。そして資料と

地図を広げ、頭の中の廻国業に10年余りを費やした。当時の廻国業に9から5年かかったというから、執筆満願成就に同じ時間をかけたことも、決して無駄ではあるまいと思い、筆を置く。

## 補記

文末ではあるが、小論を執筆するにあたって、下記の機関や人々にお世話になった。厚くお礼を申し上げたい。  
佐賀県立図書館、旧加世田市教育委員会、人吉市教育委員会、旧山内町教育委員会、竹田神社、妙光寺、大田南八幡宮、栗林文夫、吉澤 悟、桑原憲彰（敬称略）

## 引用・参考文献

佐野英山 1924 『國分日本金石年表』  
杉浦丘園 1933 『雲泉莊山誌之四』  
桑波田 興 1958 「戦国大名島津氏の軍事組織」『九州史学 第10号』（『島津氏の研究』に採録）  
近藤正 1965 「大田市南八幡宮の鉄塔と経筒について」『島根県文化財調査報告書 第1集』  
佐賀県 1962 『佐賀史料集成 第6巻』  
小沢国平 1965 「草加市柿木経塚」『埼玉考古3』  
北川鐵三校注 1966 『島津史料集』  
近藤正 1967 「島根県下の経筒について」『島根県文化財調査報告書 第3集』  
茨城県 1968 『茨城県史料近世地誌編』  
景山春樹 1969 「六部さんの法華経」『朱第6号』  
千葉県企業庁 1975 『公津原』  
桑原憲彰 1977 「相良長毎の骨塔」『熊本県文化財調査報告書 第22集』  
山内町 1977 『山内町史上・下巻』

- 三宅敏之 1983 「三重・仙宮神社の経筒」『経塚論攷』（『ミューゼアム183』1966初出）  
三宅敏之 1983 「六角宝幢式経筒について」『経塚論攷』（『東京国立博物館紀要 第4号』1968初出）  
三宅敏之 1983 「山梨・塔の越経塚」『経塚論攷』（『甲斐考古5-2』1968初出）  
加世田市 1986 『加世田市史 下巻』  
福島金治 1988 『戦国大名島津氏の領国形成』  
小田富士雄 1989 「九州古代経塚考」『考古学雑誌』第74巻・第4号  
渋谷敦 1993 「犬童善四郎とは…①～⑤」『人吉新聞』（堀野宗俊1994に再録）  
永松 敦 1993 『狩猟民俗と修驗道』  
堀野宗俊 1994 「瑞巌寺境内に建つ肥後国人吉藩主相良長毎供養碑から」『瑞巌寺博物館年報第19号』  
鶴見貞雄 1995 「武蔵野経塚の経筒と二、三の問題」『茨城考古学協会 第7号』  
石岡市教育委員会 1996 『石岡の石仏』  
国立歴史博物館編 1996 『歴代銅鏡』（中文）  
宮崎県 1998 『宮崎県史 通史編 中世』  
関秀夫 1999 「平安時代の埋經のその後」『平安時代の埋經と写經』  
足立順司 2000 「北の廻国経筒」『静岡県考古学研究32』  
根井淨 2001 『補陀落渡海史』  
藤田定興 2003 「六十六部聖・行者の廻国目的とおこない」『巡礼論集2』  
栗林文夫 2004 「井尻神力坊について」『黎明館調査研究報告第17集』  
足立順司 2004 「廻国聖の道」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』  
足立順司 2008 「西日本の廻国経筒1」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要第14号』  
松田光 2009 「六角宝幢形経筒の釈迦像」『小さな舊NO.489』2009年4月号

## Jinrikibo and Container for Sutra Scrolls of Sankan Shonin of Suruga

—Carried Container for Sutra Scrolls in West Japan 2—

Junji ADACHI

**Summary:** In this study I explore the pilgrimage of Kyusyu region and tube-shaped containers for sutra scroll.

First, I examine roles of a monk, one of the pilgrims of Kyusyu, called Jinrikibo IJIRI of Satsuma who is the only one we can identify in the Sengoku Period. Basing on the containers with his name on them excavated in Ibaraki and in Kagoshima, analyzing the situation of regions at the same time, I found that he was not a simple pilgrim monk who traveled to dedicate sutras, but at the same time, a messenger from the Shimazus to the Otomos, feudal lords of Sengoku period.

Second, I examine a hexagonal Hoban style container unburied in Minamimachi, Hitoyoshi city in a stone monument called Kotsuto (literally “a stone tower”). This monument was constructed by a man called Genshun INDO in order to comfort the soul of Nagatsune SAGARA, the lord of Hitoyoshi. Before constructing the monument there, Genshun built such a kind of monument in faraway city Oshu Matsushima, on the way of his travel for comforting the soul of Nagatsune. On the container excavated in Minamimachi, we can see a signature written as Sankan Shonin of Suruga, which is possibly a name which represents his assigned status. This container, containing teeth, is supposed to be an example of diversion of a container for sutra scroll.

Third, I point out that there were some monks practiced in Mt.Hikosan and Mt.Kurokamiyama, as well as some monks traveling around Kyushu region.

**Key words:** carried container for sutra scrolls, Jinrikibo of Satsuma, Shimazu Nisshinko, Sankan Shonin of Suruga, travel of Indo Genshun , stele for Sagara Nagatsune’s soul